

# 被災地語り部シンポジウム東北

## 全国から400人を超える参加者

ホテル観洋で 世界に通用する方策学ぶ



阿部実行委員長

3月1日で9年を迎える方策を学んだ。東日本大震災の教訓を世界に向けて語り継ぐ「全国被災地語り部シンポジウム東北」(阿部実行委員長)が2月24、25日、宮城県南三陸町の南三陸ホテル観洋で開催された。震災の風化を防ぐため若者への教訓の伝承の在り方や津波の爪痕を残す震災遺構などの重要性を伝え、昨年の熊本に続き5回目の開催となる。



基調講演した徳山氏

徳山氏は「台風などの大雨による浸水地域(ハザードマップ)の予測は正確だが、津波(地震)には災害と人生を学べる場所がある」と話した。語り部の未来をテーマにしたパネルディスカッションでは、

岩手県釜石市の旅館宝来館わがみの岩崎昭子さんは「震災がなければ経験できないことはあったが、震災で変わったわけではない。(当地に伝わる)相撲甚句で震災を語ることは、津波の怖さを次世代につなげることに間違いない。これからも語り部の思いを伝えていく」と語った。

象は忘れるが、感情は100年たっても忘れぬ。伝承と震災遺構との向き合い方について、語り部を学ぶ中高生が討論し発表も行われた。25日には、シンポジウムの総括と語り部宣言が行われた。

宮城県仙沼市の震災復興・企画部長の小野寺憲一氏は「地域の社会問題の解決なくして真の復興はない。その課題とは災害に強い街づくりと人口減少対策。水産業活性化と人材の育成が急務」と真の復興の取り組みに主眼を置いた。事共助の重要性の未来への

みについて訴えた。ドキュメンタリー映画「監督の伊美亜(ユミ)」と映画「陽来復」を学ぶ中高生が討論し発表も行われた。25日には、シンポジウムの総括と語り部宣言が行われた。

平塚真由美



変貌する南三陸町の風景。右端に旧防災庁舎が見える(2月25日撮影)

### 全国被災地語り部 南三陸宣言

私たち被災地語り部(KATARIBE)は、10年目を迎える東日本大震災地、宮城県南三陸町に国内外から集い、2月24日、25日の2日間、取り組みと課題、震災遺構、記憶と記録、語り部の未来について語り合いました。

閉会にあたり、「誰もが語り部」として、シンポジウムで得た知見を広く発信することを宣言します。

- 1、災害による試練を乗り越え、地域、歴史を学ぶことで、知識を知恵に変え、時代・社会にあわせて、言葉、映像、写真、歌、美術、文学、多言語、webなどアナログとデジタルを組み合わせた発信方法を工夫し多様な形で伝承します。
- 2、聞き手に伝わるよう、世代を超えて取り組み、縦と横のネットワークを繋げていきます。
- 3、命を守るため、教訓を被災地と被災地、そして未災地と未来に伝え、次世代や第二の語り部の育成に努めます。

これまで5回のシンポジウムで広がってきたゆるやかなネットワークを一層展開し、全国被災地語り部シンポジウムを継続していきます。

第5回全国被災地語り部シンポジウム in 東北  
2020年2月25日

東日本大震災から9年